

# 談話における吸気(ingressive)の役割について

近藤 富英

## 1. はじめに

コミュニケーション活動において、言語は主な手段ではあるが、身振りやパラランゲージ(類似言語記号)などのさまざまな記号体系であるコードが相互作用的に働いていることは、長年の研究から明らかになってきている。すなわち通常、人間のコミュニケーション行動は、言語のみで成り立つのではなく、身体の動きをはじめ、言語とは別の音声も使用することによって成立しているのである。このことを、ジョージ・トレーガー(1958)は以下のように述べている。

There it is pointed out that language was accompanied by other communication systems, one of motion – kinesics, and one of extra-linguistic noises – vocalizations. (1958: p.2)

言語は、他のコミュニケーションシステムである身体の動き(motion)と言語以外の音(extra-linguistic noises)を伴うというわけである。

トレーガーは、パラランゲージの詳細の分類を行い、実際に話しているときの発声そのものを「発声ぶり(Vocalization)」と名づけたが、言語以外の独立した音を、とくに「ボーカル・セグリゲイツ(vocal segregates)」と呼んだ。トレーガーによれば、実際の談話において「咳払い」などさまざまな言語以外の音が使われるが、呼吸に伴う「息使い」も言語以外の音の中の「ボーカル・セグリゲイツ」として分類されている。

本稿ではこのボーカル・セグリゲイツとして分類された息使いの中のとくに「吸気」が、言語とどのような関係を持ち、実際の談話においてどのような役割を果たしているかを考察することを目的とする。

## 2. トレーガーのパラランゲージ分類法

トレーガー(1958)は、下記のように「パラランゲージとカイネシックス(身振り動作)の言語に対する関係は似ているのではないかと類推をしている。

The theoretical description of the field (of kinesics) has gone along with that of paralanguage, and it appears that in their overall structure these two fields of human behavior may be largely analogous to each other, as contrasted with language. (1958: p. 7-8)

しかしながら、1950年代後半は、パラランゲージもカイネシックスの研究もやっとならばばかりであったため、これらの役割や相互関係については説明されていない点が多かった。しかし、トレーガーは後の研究の基礎となるシステムティックな分類を行ったのであるが、その機能や役割までは言及していない。

トレーガーは、パラランゲージではないが個人特有のものとして「音質背景 (voice set)」（たとえば「男性らしい声」や「子供っぽい声」など）をパラランゲージが判断される基準として設定し、「音性 (voice quality)」と「発声振り (vocalizations)」のふたつをパラランゲージとした。「音性」とは、実際の話とは切り離して研究が可能な、「声の高低や早さなど」をいい、発声振りとは、「実際に話しているときの音声そのもの」のことであり、発生振りは、さらに「音性格 (vocal characterizers)」、「音限定 (vocal qualifiers)」、「音分離 (vocal segregates) = ボーカル・セグリゲイツ」の三つに分けられる。

本稿では、談話中の息使いである「吸気」を取り上げるので、「発声振り」の中の「ボーカル・セグリゲイツ」のひとつを扱うことになる。

なお、外国人の間で有名な日本人が立てる音に強い摩擦を伴う吸気がある。すなわち、話の最中に上の歯茎の裏と舌先で息をスーッと吸い込みながら強く摩擦させる音である。これはとくに日本人男性特有の行動と言われているが、これを強い吸気、とくにスー音 (hiss) として扱うことにする。

### 3. データについて

#### 3. 1 データについて

談話の研究においては、データ・ベースの作成が準備段階で大きな比重を占めるが、いったん文字とそれに伴うパラランゲージやカイネシックスを記入したものが用意できると、その同じデータ・ベースを基にして、さまざまな角度からの分析・研究が可能となるのである。今回の談話における「吸気」の研究についても、近藤(2005, 2006)で使用したインタビュー番組を使用したものと同じデータ・ベースを使用することとした。近藤(2005)では、ポーズの研究を近藤(2006)ではギグリングの研究に使用したものである。

あらためて今回もデータとして用いたテレビのインタビュー番組について簡単に説明しておく。近藤(2005, 2006)でも述べたが、データとして用いたテレビ

番組は、2004年9月29日に放送されたインタビュー番組『徹子の部屋』（テレビ朝日系）である。司会の黒柳徹子が毎回、ゲストをスタジオに招き、正味30分の対談をする番組であるが、使用したデータ・ベースはシンガー・ソングライターのタケカワユキヒデをゲストに招いたときのものである。話題はゲストであるタケカワユキヒデの長女の結婚式についてである。

このような談話研究においては、できるだけ自然なインタラクティブを用いる必要がある。この番組の司会の黒柳は、番組録画にあたり下調べをしたのち、話題にするトピックや進行のための時間配分は事前に打ち合わせていると思われるので、まったく自然な談話とは言えないであろう。カメラも参加者は意識をされると思われる。しかし、実際のインタラクティブを用いるのも、やはりカメラの設置が必要であるし、なかなか無理な点が多い。その点、この番組はある程度、自然で臨機応変なやりとりとなっている。たとえば、「です・ます調」で番組が始まっても話が盛り上がると「だ調」になったりすることからも、かなり自然や談話と判断できる。そういった理由で使用している。

### 3. 2 データ・ベース作成について

実際に用いたデータ・ベース作成はもとも次のような手順で行っている。(1) 適当と判断した番組をビデオ録画する(今回は『徹子の部屋』)。(2) データ・ベースとして利用するには番組の進行に合わせた経過時間が示されている必要があるので、タイマーでリアルタイムを付けて他のテープにダビングする(実際にはこのリアルタイム付きのダビングテープをデータ・ベース作成に用いる)。(3) 音声のみをオーディオ・テープに録音し、そのオーディオ・テープを基にすべての会話をデータ・シートに書き起こす(データ・シートとは話された言葉と吸気などをはじめとしたパラランゲージ、さらには手や視線の動きなどのカイネシックスを同時に記入するために開発したデータ用紙のことである)。(4) タイマー入りのビデオを見ながら、書き起こした文字に沿って、あらかじめ決めた記号を使いながら、パラランゲージと身振りを総合的に記録する。今回は「吸気」について調べることが目標なので、分析時はとくに吸気について着目するが、視線や顔の向きなど他の動きと関係していることが考えられるので、それらについても同時に注目する。

### 3. 3 データ・シートについて

データ・ベースの基となるデータ・シートはB4の用紙を横向きに使い、上下2段に分けて、それぞれ黒柳(K)とタケカワ(T)の2人の記入部分がある。それぞれの記入部分は、さらに言語記号(L)とパラランゲージ(P)を記入する部分、さらに身振り動作などのカイネシックス(K)を記入する三つの部分に分かれて

いる。なお、一番上にはリアルタイムを表示するTがあり、番組が始まってからの分と秒が記入できるようになっている。以上を示すと以下のようなものである。

T	分 秒	
K	K P L	
T	K P L	

### 3. 4 データ・シートに使用する記号

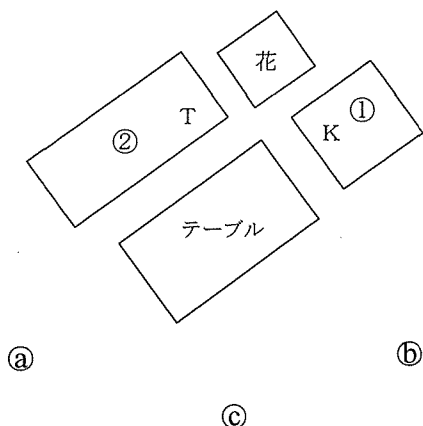
データ・シートへの記入のしかたであるが、まずそれぞれの発話は漢字かな混じりの正書法を用いて、L(言語記号)の欄に記入した。「吸気(ingressive)」の生じた場所にはingという記号を使い、P(パラランゲージ)の欄に書き込んだ。さらに発話の前後で視線や腕の動きなど特徴的な動作があった場合はK(カイネシックス)の欄にその旨を記入した。以下に使用したおもな記号について記しておく。

Ing(ingressive): 吸気    Hiss(hissing sound): 吸気(スー音)  
 Nod(nodding): あいづち    Ey(eye contact): 視線を合わせる  
 Ps(pause): ポーズ    Gi(giggling): ギグリング  
 Lf(laughing): ラッフイング    Te(tempo): 速さ  
 -----→: 継続と終了点を示す  
 (身体の動きなどは言葉により簡単に説明を記した)

このように書き表すことにより、時間の経過とともに全体の活動が総合的に把握でき、また二人のやりとりが重なっても同時に示すことができる。ただし、テレビ画面が一人しか映していない場合は、画面に映されていない側のカイネシックスは不明となるが、これがテレビ番組を使用する大きなデメリットではある。ただし、今回は息使いである「吸気」がテーマなので、大きなデメリットにはなっていないと考える。

### 3. 5 参加者とスタジオのセット

番組の収録が行われた場所はテレビ局のスタジオのセットであり、青空と緑を映すガラス窓を模した背景を背に、椅子とソファが 120 度ほどの角度でそれぞれ斜めに配置されている。椅子には黒柳(K)が座り、ソファにはタケカワ(T)が座っている。ソファと椅子の間(二人の横)にはサイドテーブルに花が置かれ、二人の前にはコーヒーの乗ったテーブルが配置されている。以上を図示すると以下ようになる。



①に黒柳が②にタケカワがそれぞれ座っている。カメラは a、b、c の 3カ所にあるらしく、a が黒柳を、c がタケカワをそれぞれ捉え、b が二人を同時に映していると思われる。

### 4. 結果と考察

談話に従事していると、肺の中の空気がだんだん少なくなり、生理的現象として息継ぎの必要が生じる。それで時々息を吸うのはとうぜんのことであるが、いつでも息を吸っていいように見えて、じつは談話行動の中では、その生理現象に機能と役割を持たせていると考えられる。

観察の結果、ボーカル・セグリゲイツ (vocal segregates) のひとつである吸気 (ingressive) には、大きく分けてふたつの種類がある。ひとつは談話参加者同士のインタラクションと深く関係するものと話し手一人の心理的要因で行われるものである。前者については (1) ターン・ティッキングに関するものと (2) あいづちとして使用されるものがあり、後者については (3) ヘジテーションとしての機能として使用されるものと (4) 感情に影響を受けるもの、がある。すなわち、(1) と (2) は談話のやりとりに関係するので、話し手と聞き手の両方が関係し、(3) と (4) は、話し手自身がいわば一人で使用していると言える。

#### 4. 1 ターン・ティッキング (turn-taking) に関する吸気

談話において、もっとも吸気が使われるのは、ターン・ティッキングに関するものであった。ターン・ティッキングは話し手と聞き手の相互作用として行われるものであり、のちに述べる個人の心理的要因が基となって行われるヘジテーションや感情に影響を受けるものとは異なるものである。ターン・ティッキングに関するものとしては、ターンの始まりを示すもの、ターンの継続を示すもの、そしてターンの終結を示すものがある。

##### (a) ターンの始まりを示すもの

以下に例を上げながら、ターンの始まりを示す吸気について見ていくこととする。

例 1 :

T	分 秒	03 15
K	K	Ey: Tを見る
	P	Ps
	L	学生結婚 <span style="float: right;">だけど学生</span>
T	K	Ey-----→
	P	Ing
	L	そうですね。形としてはそういうことになり

今回の例では、ターンを無理やり奪うような用法としての吸気は見当たらなかった。上の例では、K (黒柳) が、T (タケカワ) の娘の結婚式に言及して、学生結婚であることを確認している部分である。K が「学生結婚」と言ったままが

ーズを設けている。これに促されて、Tは吸気を行ったあと「そうですね」とターンを始めている。このように吸気を行うことで自分のターンの始まりを示しているのである。なお、Tは吸気を行いながら、視線をあわせず顔を上に向けて考えているしぐさをしている。このことから、返答としてのターンを受け取ったことがより明らかに明示されている。

例2：

T	分	02
	秒	48
K	K	
	P	
	L	結婚なさることになったお嬢様は何歳 <span style="float: right;">それぐらい</span>
T	K	Ey-----→ 顔を上に向ける Ey
	P	Ing Te:ゆっくり
	L	えーと、24かな

例2では、Kが「結婚なさることになったお嬢様は何歳？」と質問しているが、その質問に答える直前に吸気を行ったのち、「えーと、24歳かな」と答えている。このように自分からターンを奪うのではなく、相手の問いかけに反応してターンを始める前に吸気を行うことが多いようだ。これにより相手に対してターンを受け取る意思を示していると考えられる。Tは、吸気を行った直後にあいづちを行っているが、このあいづちもターンの受け取りを確実なものにしている。なお、このように、ターンの受け取りを示すものは、たくさんあるが、同時に使用される数が増えれば増えるほど、ターンを受け取ったというフィードバックが明瞭になるのである。はずしていた「視線を合わせる」というのも、通常はターン受け取りのシグナルになるが、例1においては、逆に視線をはずして考えているそぶりを示すことで、ターンを自分のものにしていく。このように、ターン・ティキングのシグナルは状況に応じてダイナミックに変化するのである。

相手に反応するのは同じだが、疑問文だけとは限らない。次の例3に示すように、相手の発話に反応しているのだが、Kの「娘がゾロツ」という発話に対して、Tはオーム返しに「ゾロツといますね、はい」と答えている。このように必ずしも疑問文だけではなく、相手の発話を用いるなど、相手とさまざまなインターアクションを持ちながら談話は進行するのである。

例：3

T	分 秒	03 08									
K	K P L	それにしても年頃の娘がゾロツと ねえ									
T	K P L	<table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 30%;">Ey-----→</td> <td style="width: 40%;">Nod</td> <td style="width: 30%;">Nod</td> </tr> <tr> <td></td> <td style="text-align: center;">Ing</td> <td></td> </tr> <tr> <td>はい</td> <td style="text-align: center;">ゾロツといますね</td> <td>はい</td> </tr> </table>	Ey-----→	Nod	Nod		Ing		はい	ゾロツといますね	はい
Ey-----→	Nod	Nod									
	Ing										
はい	ゾロツといますね	はい									

先にも述べたように、今回のデータには、「ターンを無理やり奪って話を始める前に使われる吸気」の例は見当たらなかった。Kが司会者なので、Kが積極的にターンを始める場面は多いのであるが、吸気は用いていない。またTはゲストなので、Kの質問に答えたりKの発話に応じたりするわけであるが、ゲストという立場上、自らターンを奪うということはあまり見当たらなかった。このことから、ターンの始まりを示す吸気が上記の例1から3に限定されていたようである。ともかく、相手に反応してターンを始める前に、スムーズなインターアクションのために吸気を行うということは、ターン・ティキングのシグナルとして作用していることがわかる。

(b)ターンの継続を示すもの

吸気にはターンの継続を示すものもあるので、以下にその例を示す。

例4：

T	分 秒	05 34									
K	K P L										
T	K P L	<table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 30%;">Ey-----→</td> <td style="width: 40%;"></td> <td style="width: 30%;"></td> </tr> <tr> <td>身体を左右に揺する</td> <td style="text-align: center;">Ing</td> <td style="text-align: right;">Gi-----→</td> </tr> <tr> <td colspan="3">持ちかけたんですけどもね。そうしたら私一人だけ盛り上がって</td> </tr> </table>	Ey-----→			身体を左右に揺する	Ing	Gi-----→	持ちかけたんですけどもね。そうしたら私一人だけ盛り上がって		
Ey-----→											
身体を左右に揺する	Ing	Gi-----→									
持ちかけたんですけどもね。そうしたら私一人だけ盛り上がって											



例4は文の途中で吸気を行っている例である。この文の途中の吸気はもっとも多く談話中に見られるものである。Tが娘の結婚式の企画を持ちかけたことを述べた部分である。Tが「持ちかけたんですけどもね、そうしたら、私一人だけ盛り上がりすぎてしまって」と話しているが、「そうしたら」と言ったあと軽い吸気を行っている。

例5：

T	分	01
	秒	14
K	K	わかんないね
	P	
	L	
T	K	首を傾げる Gi 顔を向く
	P	Ey-----→ Ing
	L	もう何だかわかんないですよね。うちのだって末の娘は2歳でおばさん

例5は、Tが「子だくさん」ゆえに人間関係がややこしいということを描いている場面である。「もうなんだかわけわかんないですね」と言ったのち、吸気を行い、さらに「うちのだって末の娘は2歳でおばさん」と続けている。すなわち話し手であるTは、ひとつの文が終わり次の文を始める前に吸気を行い、まだ自分のターンが終わっていないことを示しているのである。それゆえ、ターンの始まりではなく、新しい文の始まり、つまり自分のターンの継続を示しているのである。

なお、吸気の際、ギグリング(声を出す軽い笑い)をし、さらに顔を上に向けてターンを継続している。Kが同時に「わかんないね」とあいづちを打っているが、かまわずふたつの文を続けている。この場合は吸気、ギグリング、顔の上向きなど、すべてのシグナルが同時に働いてターンの継続を示していると思われる。最初の吸気によって継続の合図をし、ギグリングと顔の向きでその効果を強めているとも考えられる。

(c)ターンの終わりを示すもの

今までの(a)と(b)の例によれば、吸気のターン・ティキングのメカニズム

としての役割はターンの始まりや継続を示すことであったが、じつは吸気はターンの終わりにも見られることがある。以下はその例である。

例 6 :

T	分 秒		07 08
K	K P L		ま、手作りにせよ
T	K P L	両手を広げる	Ey-----→ Te:ゆっくり Ing 厳かな感じでやった方がいいよという話をして

例 6 は、T の娘の結婚式について、T が家族にアドバイスをした経緯を語っている場面であるが、T は「厳かな感じでやった方がいいよという話をして」と言ったのち、吸気で発話を止めている。最後の「～して」は視線を合わせながらゆっくり発話しているので、あたかも相手のターンを誘っているように見える。実際にK は、すぐに「ま、手作りにせよ～」と述べてターンの交替が行われている。生理現象としての吸気を考えると、話す前にもその準備として空気が必要であると同様に、話し終わった直後も、いわば酸欠状態のため吸気が必要なことが多いのである。従って、発話直後に吸気を行うことは生理現象とも言えるが、相手にターンを示しているとも考えられる。それにより聞き手は発話の終わりを知るのである。

例 7 :

T	分 秒		01 05
K	K P L		ね、そんな大きな孫がいて
T	K P L		Ey-----→ Ing 中学校 2 年と小学校の 6 年と小学校 2 年ですからね。

例7は、Tが孫の年齢を説明している「くんだり」であるが、「中学校2年と小学校の6年と小学校の2年ですからね」と言いながら最後に視線を合わせて、そののち、吸気を行っている。例6と違うのは、例7が自分からターンを離れてはいるが、例6のように相手のターンを誘っているように見えない点である。しかし、この場合もKは「ね、そんな大きな子がいて」とターンを受け取っているのである。

ただし、KはTの発話直後にターンを続けているので、ほぼKの吸気と同時に話し始めている。したがって、この例7の場合は吸気が相手のターンを誘っているのではなくて、たんに自分のターンの終わりを示しているだけかもしれない。これについては、さらに多くのデータを検証する必要があるようだ。

#### 4. 2 あいづち (feedback response) に関する吸気

この「あいづち」に関する吸気もターン・ティッキングと同じように、参加者同士のインタラクションと密接な関係があるものである。当たり前であるが、相手の発話に対して「あいづち」を打つからであり、相手の発話無しでは生じ得ないという意味である。

例8：

T	分	00
	秒	37
K	K	義理の息子が増えたということで、そういうことで全部で子供は何人
	P	
	L	
T	K	Ey Nod Nod Ey----->
	P	Ing
	L	はい

この例においては、Kが「義理の息子が増えたという」と述べると、Tは吸気を行いながら「はい」とあいづちを打っている。その直後には視線も合わせ顔を縦に振っている。Tがその後ターンを取っていないことと、視線を合わせることや首の縦ふり (nodding) などの他の「あいづち」と一緒に使われていることから、この例の吸気も「あいづち」であることがわかる。

#### 4. 3 ヘジテーション(hesitation)に関する吸気

吸気には、4. 2で述べたターン・ティキングの役割のほかに、ヘジテーションとしての役割があることがわかった。これは前述したように、話し手と聞き手のインターアクションとして起こるのではなく、話し手自身の心理的要因によって生じるものである。すなわち、話し手が話の途中で、息を吸いながら次に話すことを考えているのである。

この吸気は4. 1ターン・ティキングの(b)で述べた「ターンを継続する吸気」と非常によく似たものであるが、多くの場合は吸気の摩擦が大きくなるスー音(hiss)が使用される。また他のヘジテーション・シグナルと使用されることから違いがわかる。

例9 :

T	分 秒	20 04
K	K P L	
T	K P L	Ey 右上                      首を横に振る                      Ey-----> Hiss 途中で    あの花嫁の    ああ    花婿の父とすっかり仲良くなっちゃって

例9は、ヘジテーションとしての例である。Tが娘の結婚式のようすを述べている箇所であるが、「途中で」と言いながら、吸気(スー音)を行って考えながら発話を続けている。視線を右上に動かしていることからヘジテーションだということがわかる。次の例10も同様の例であるが、やはりスー音(hiss)が使われている。やはり視線を右下にずらして考えていることがわかる。いわば時間稼ぎをしているわけである。

例10 :

T	分 秒	06 37
---	--------	----------

K	K	
	P	
	L	ええ、忙しくしていれば
T	K	Ey 右下を見る Ey
	P	Hiss Gi
	L	大変だったので こんどはお仕事をしよう

#### 4. 4 感情に影響を受けるもの(affect display)としての吸気

これも4. 3のヘジテーションと同様に、話し手個人の心理的要因に関連した吸気であり、インターアクションにはとくに大きな意味合いを持たない。ただし、談話行動においてはよく見られるものであり、笑い(ギグリングやラフピング)の後や感嘆などの感情をこめたときに用いられる。

例11:

T	分	05
	秒	37
K	K	
	P	
	L	うんそう、で家族はみんな
T	K	
	P	Ey-----→ Lf Ing
	L	わたし一人が盛り上がってしまっ て ええ

例11は、Tが結婚式の計画について語っている箇所であるが、「私一人が盛り上がってしまっ て」と言ったあと声を出して笑って(laughing)いるが、その後には吸気を行っている。笑うときには多くの空気を吐き出すので、生理的にもその分、息を吸うことが必要になると思われるが、笑いが終わったことを示していると捉えることもできる。

例12:

T	分	09
	秒	58

K	K P L	
T	K P L	Nod Nod Ey 上向き Hiss こっち側向いているわけにはいけないので、そうか、これお父さんやってくれる

例12は、Tが新郎の父親に神父役を頼んだことを説明している部分であるが、「こっち側向いているわけにはいけないので」と言ったのち、「そうか」と続けて吸気(hiss)を行っている。視線は上向きで「いいことを思いついた」といったようすの感動を表している。このようにインタラクションとは無関係でも話し手の心理的要因によって生じる吸気もあるのである。

## 5. さいごに

吸気は多くの場合は、半無意識に行っている談話行動のひとつであると思われるが、見てきたように談話行動において、いくつかの役割を持っていることがわかった。参加者のインタラクションに関するものとしては、ターン・テイキングとあいづちに関するものがあり、話し手個人の心理的要因として生じるものとしては、ヘジテーションと感情に影響を受けるものがあった。

一番多く使用される吸気は、ヘジテーションの継続シグナルとして使われるものようであり、とくに摩擦の多いスー音(hiss)が用いられる。このスー音はとくに日本の男性が用いるということで知られているが、今回のデータにおいても使用したのは男性であるTのみであった。このスー音が起こる理由として、日本人は発話時に唇や顎をあまり動かすことをせず、また多くの社交的な場面でソフトな音が求められるからだ、という説もある。このように人間は生理現象とさえ言えるような吸気も談話においては、意味合いを持たせていることがわかった。

今後の課題としては、吸気の男女差や視線などの他のシグナルとの精緻な関係をはじめ、吸気と反対の「呼気(egressive)」の研究も考えられる。

### 参考文献

近藤富英

2006 「ノンバーバル・コミュニケーション行動としてのポーズの機能と役割への

- 一考察]、『信州大学人文学部人文科学論集<文化コミュニケーション学科編>』、第40号。
- 近藤富英  
2007 「会話におけるギグリングの機能と役割への一考察]、『信州大学人文学部人文科学論集<文化コミュニケーション学科編>』、第41号。
- M. Swan and B. Smith (Eds.)  
1987 *Leaner English*, Cambridge University Press.
- Trager, George L.  
1958 “Paralanguage: A First Approximation,” *Studies in Linguistics*, New York: Department of Anthropology and Linguistics, University of Buffalo. Also produced in *Language in Culture and Society: A Reader in Linguistics and Anthropology*, Dell Hymes (ed).

(信州大学 全学教育機構 准教授)

2007年4月27日 採録決定